

春先の水稲栽培のポイント!



農学博士

～育苗管理と本田準備、移植後の水管理～

群馬県利根沼田農業事務所

気象庁発表の令和7年の暖候期予報(2月25日発表:6月～8月)では、「暖かい空気に覆われやすいため、夏の気温は高い。梅雨時期と夏の降水量は、ほぼ平年並の見込み。平均気温は高い確率が70%」となっています。気象予報を参考にして、準備を進めましょう。今回は春先の水稲栽培のポイントを紹介します。

1 育苗管理

育苗期間の高温は徒長苗や病害の発生原因となります。表を参考に育苗期間中の温度管理に注意して、健全な苗づくりを行いましょう。

緑化は2～4日かけて行い、昼間20～25℃、夜間は10℃以上とします。

硬化期は、特に30℃以上にならないようにします。平床育苗については、育苗前半のかん水は午前中の早い時間にたっぷり行います。後半は、乾燥している場合のみ午後3時頃までに2回のかん水を行います。(表参照)

草丈12cm、葉齢2.0葉での田植えが目標となります。

表 育苗期間中の管理の目安

	緑化期	硬化期	
		平床育苗	プール育苗
期間	出芽後2～4日	緑化後～田植え(約20～25日)	
葉齢	0.5～1.0葉	1.0～2.0葉	
温度管理	日中20～25℃	気温日中15～20℃	水温日中25℃以下
	夜間10℃以上	気温夜間10～15℃	水温夜間10～25℃以下
水管理	1日1回午前中にかん水	前半:1日1回午前中にたっぷりかん水 後半:乾いたら15時頃までに2回目	1回目入水:培土表面まで 2回目入水:培土が隠れるまで

- 高温時は過剰な被覆で温度が上がり過ぎないように注意します。(30℃以上にしない)
- 夜間低温が予想される場合は、日が落ちる前に保温資材で被覆します。
- 2葉目が出始めたら過保護にしないよう心がけましょう。

近年増えている病害に「イネもみ枯れ細菌病」があります。育苗中でも本田でも発生する病害ですが、育苗中では、高温条件(27～33℃)になると発病します。坪状に腐敗苗が発生し、引っ張ると簡単に引き抜けるのが特徴です。(写真1)。最近では、春先の気温も平年より高くなってきておりますので、今まで以上にハウス内の温度管理を徹底する必要があります。ハウス等の換気について、前半は日中に行い、夜間はハウスを閉めます。後半は外気に慣らし徒長を防ぐため、終日開けておきます。また硬化期頃は日中のハウス内温度は30℃を超すようになってきます。ハウス内温度は一度上がると下がりにくいため、早朝の換気を徹底しましょう。ただし、極端な低温や強風時は適宜ハウスを閉めます。



写真1
もみ枯れ細菌病(発生初期)

2 本田の準備

漏水のない水田は水管理のために重要です。畦畔からの漏水を防ぐため畦塗りはしっかりと行います。畦波板を使う場合はできるだけ深く設置し、漏水を防ぎます。

代かき作業には、①碎土や土壌の均平化、②刈株や残さの埋没、③漏水防止、④肥料分布の均一化、⑤雑草の発生抑制など、様々な効果があります。代かき時に水の量が多いと均平作業が難しいため、田面の高いところが出る程度の水位で行います。

3 水管理

移植直後は「深水管理」が基本です。深水にすることで、①植え傷みの回復を早める、②除草剤の効果を高める、③低温からの苗の保護などの効果があります。

活着後は「浅水管理」です。水深を2～3cmにして、水温上昇を図り、初期生育の確保と分けつ促進を図ります。かん水は夜間や早朝に行い、昼間は止め水にして水温上昇に努めます。

概ね移植後30～35日を目安に「中干し」を行います。中干しの目安は、落水して土壌表面に小ヒビが入ったら完了です。(写真2)この時期に長雨等で水が抜けないこともありますので、天候に応じて早めに中干しに入りましょう。中干し後は間断かん水に移ります。



写真2 中干し

4 除草剤使用時の注意点

近年は粒剤やジャンボ剤、豆つぶ剤など、様々な種類の除草剤が販売されていますので、必ず農薬ラベルの使用方法を確認して使用します。

初中期一発処理剤などの除草剤は、水中に広がった成分が土壌表面に処理層を形成することで効果を発揮します。そのため、除草剤の散布後4～5日間は水尻を止めて湛水状態を保ち、水が引いて田面が露出する場合のみ、ゆっくりと入水してください。散布後7日間は落水やかけ流しは避けて下さい。

5 病虫害防除

昨年は、夏場の高温により、高温登熟障害の発生や8月後半の降雨によって稲こうじ病が散見されました。またカメムシ類の発生も多く、斑点米の発生も見られました。天候の状況や病虫害の発生状況を注視し、早めの防除を行いましょう。

農畜産課農畜産係(渡)

農業技術に関するお問合せ TEL 23-0188